OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	教育実践資料の収集・選択・活用に関する一考察　～人材の介在に着目して～
Author(s)	齋藤, 陽子
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69296
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　齋　藤　陽　子　）	
論文題名	教育実践資料の収集・選択・活用に関する一考察 ～人材の介在に着目して～

論文内容の要旨

実践記録集や研究紀要などの教育実践に関わる資料は多く保存されている。しかし，教育実践の実践プロセスに関わる資料は少なく，活用も十分されていないと思われる。その理由として，①教育実践資料の保存内容に課題があるのではないか，②教育実践資料の中で必要な情報を的確に選択できていないからではないか，③選択しても，その教育実践資料の意味への理解が不十分で，現在の教育実践における課題解決に十分に活用できていないのではないか，との３点が考えられる。この３つの課題を解決するために，本研究では，実践事例に基づき，①教育実践にかかわる資料として何を保存すべきか（第２章），②これらの資料群から必要な情報をどのような方法で選択するのか（第３章），③選択した教育実践資料に関する活用方法の考察（第４章）を行った。それらの考察から今後の教育実践資料の在り方について考察をし（第５章），本研究の結論と今後の展望（第６章）を述べた。

第１章では，緒言として，本研究の問題提起を行っている。これまで，学校教育においては様々な教育実践が行われ，活用された資料や教育実践そのものをまとめた実践記録集などが都度蓄積されてきた。これらは，研究紀要や研究報告書，学習指導案集などとして保存され，保存されたものはインターネット上で公開されてもいる。しかし，これらの資料は，何が課題でどのような結果が得られたかに関するものが多く，指導過程の様子や指導方法・児童生徒の状況などの実践プロセスに関わる資料（プロセス資料）は保存されていない場合が多い。したがって，公開されている教育実践に関わる資料を参照しても実践方法が分からず，その知見を教育の場で実際に上手く活用しがたい状況にある。

そこで，本研究では，教育実践に関わる資料どのように収集・保存し，選択・活用すると，教育課題の解決に資することができるのかを明らかにするとともに，さらには，その一連の流れを有機的に回していくためには「人材の介在」が重要ではないかと仮説し，人材の果たす役割とその重要性について明らかにすることを目的に事例を通して検討した。

第２章では，「教育実践に関わる資料」として，取り扱う範疇を広く，教科書，学習指導案，授業の展開に必要な教材・教具，学習プリント，評価問題，児童生徒の学習状況を把握した資料，授業を記録した映像，写真，授業の過程を示したフローチャート，授業実践の成果をまとめた論文，研究紀要，雑誌等の記事などの全てにわたると定義した。これらの教育実践資料は，多くが教育委員会のデータベースや大学・研究機関のデータベースに保存され，一般公開されている。調べると，これらの教育委員会や大学・研究機関が保存している教育実践資料は，研究の課題とその解決の結果が示された研究紀要や報告，論文等の形をとるものが多かった。一方，教師が自分の実践を学習指導案やその時の板書計画，実際に板書を写真撮影したものなどのプロセス資料は，教師自身が保存していることが多くあった。筆者が所属する教育機関には，このプロセス資料を含んだ教育実践資料が長年蓄積されている。

本研究では，その中で初任教員３年間におけるプロセス資料を選び出し，児童の学習・生活の状況を把握した「個人カルテ」，どのような学習内容を指導していくとよいか分析をした「学習内容の構造化」に着目した。このプロセス資料に基づき，沖縄県の小学校で算数の学習指導を行った結果，学力・学習状況調査において全国の平均点を上回るという学力の向上が認められた。このことから，過去に保存された教育実践資料も現在・未来の教育課題解決のために有用であることが示唆された。

第３章では，保存された多くの教育実践資料から，現在の教育課題解決のために必要な資料をどのようにして選び出すか，選択の方法について検討した。これは，資料選択をした人材の研究活動より検討した。教育実践資料の選択

においては，人材がその資料と対話し，内容を吟味し選択している様子がうかがえた。その様子を順に示すと，次の５つである。①教育実践資料に表題を付加する。②表題やキーワードで使われている用語の分布をデータ処理で求める。③どのような項目が研究・実践されているのか傾向を分析する。④出現頻度の多い用語が使われている研究資料，数値データを抽出し，その内容を調べる。⑤利用目的に適するデータかを精査する。このように教育課題解決のために求められている資料を選択していた。これを他の人材が行おうとしても，失敗することが考えられる。実際に，別の人材が行ってみたところ，①の資料に表題を付ける段階から，この人材とは異なるものとなることが少なからずあった。さらには，その作業の時間も多くを有することとなった。⑤の段階においても，利用目的は理解ができていても，データがそれに適しているかの判断が，人材との資料の内容への理解の違いにより，異なることがあった。それらのことから，この手順を効率よく的確に進めるには，保存されている資料について精通しており，その分野（今回は，教育）にも造詣が深い人材の存在が重要な役割を果たしている可能性があるとの見解を得た。

第４章では，教育実践資料を小学校での児童への学習指導に活用する方法を考察し，検討した。選択された教育実践資料は，その原型のまま児童に直接的に指導をする者（教師）に渡さず，教師が理解でき，学習指導に適した形に再構築して提供された。それが，「手引き」や「パンフレット」の形であり，その形への編集のし直しが重要であることが見えてきた。この編集如何により保存資料活用の成否が問われることが伺えた。児童の学習指導に活用することは，教師自身の学習指導力，授業力の向上にもつながるものであることも実践を通して確認した。

第５章では，今後の教育実践資料の在り方について，これまで述べてきた収集・選択・活用の各段階において重要な事項を整理して述べた。①教育実践資料として何を保存すべきかについては，プロセス資料まで含んだ保存が，現在・未来の教育課題解決のために有用であることが示唆された。②必要な情報の選択方法については，教育実践資料の選択において，そこに関わる人材の存在が大きく，その能力として保存資料と教育に造詣が深いことが大切であると考えられた。③資料の活用方法の考察結果として，保存資料の再構築が重要であり，そのことが，児童への学習指導で活用されていくことにつながることが示唆された。

第６章では結言として，プロセス資料を含んだ教育実践資料の収集とその後，それらから何をどのように選択をするのか，それを現在の教育課題解決のためにどのように活用するのかについての実証と検討についてのまとめを行った。本研究をとおして，教育課題の解決に資するためには，①教育実践資料としてプロセス資料を含んだ資料を収集・保存することが必要であること，②収集された教育実践資料から，現在の教育課題の解決に対して適する資料を選択するためには，専門的知識を備えた人材が果たす役割が重要であること，③選択された資料を活用して実践をする際に教師が活用できるよう資料を再構築することが必要であり，その際にも教育実践資料や活用する場・教師への理解を十分にしている人材がそれを担うことがよいこと，この３点が示唆された。ゆえに，教育実践資料の収集・選択・活用において「人材」の果たす役割が重要であることが見えてきた。

これらのことから，今後の展望として，今後起こりうる様々な教育課題を解決していくための一つの手段として，プロセス資料を含んだ教育実践資料の収集・保存・それを選択・活用し，そこで生まれた新しい教育実践資料をさらに保存というサイクルを可能とする「教育実践資料デジタルアーカイブ」の構築が求められることについて言及した。このサイクルを回していくためには，資料選択の際に，人材の介在が重要であり，この人材の育成も今後大切なことであることに触れ，今後の展望とした。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（　　齋藤陽子　　）		
	（職）	氏　　名
論文審査担当者		
主 査	教授	前迫 孝憲
副 査	教授	三宮 真智子
副 査	准教授	西森 年寿

論文審査の結果の要旨

本論文は、教育実践にかかわる資料を、どのように収集・保存し、選択・活用すると、教育課題の解決に資することができるかを、実践研究の中で明らかにしている。そして、選択・活用の過程において「人材の介入」が重要なことを指摘している。

論文は６章から構成されている。

第１章では、研究の背景と目的を述べている。第２章では、国立教育政策研究所や国立特別支援教育総合研究所をはじめ、多様な機関・組織が収集・保存・提供する教育実践資料に関して調査を行うと共に、教育現場における活用の方法や資料の保存内容に課題があることを指摘している。さらに、1960年代に、ある新任小学校教師が周囲の協力を得て作成・保存した、児童の活動や授業の記録に着目、その内容を詳細に分析している。そして、当該資料等を学力向上の取り組みに活用した沖縄の事例から、教育課題解決のために保存・活用すべき資料内容の検討を行っている。

第３章では、前者の事例で資料の選択を行った人物の果たした役割を追跡し、選択に際して保存資料に精通しており，当該分野に造形が深かったことを指摘している。続く第４章では、活用に際して，対応する地域や学校、教師の実態に配慮した資料の再構築が重要であったことを述べている。

第５章では、これまでの結果を整理し、教育実践資料には利用過程まで含んだ保存が有用であることや、選択者の能力の影響が大きいこと、さらに活用現場の実態に合わせた再構築が鍵となることを記している。そして、第６章では、まとめと今後の課題や研究の展望を述べ、デジタルアーカイブ構築の意義と担当する人材育成の重要性に言及している。

本論文は、実際に保存されてきた教育実践資料を対象として、その活用過程を追跡する中で、介在する人材の重要性や資料再構築の意義を丹念に記述しており、教育工学分野のみならず、今後の関連分野の先行研究として十分な価値を有していると考える。

以上により、本論文は博士（人間科学）の学位授与にふさわしいと判定した。